

Mr. Scarborough's Family における subversiveness ——the “official” と the “unofficial” の競合——

香山 はるの

I. 序

今日 Anthony Trollope (1815-1882) の作品は、本国イギリスで依然として広く読まれている一方、批評家たちの間では、「ヴィクトリア朝の特権階級が持っていた価値観を自己満足的に描き出したものに過ぎない」としばしば見做され、あまり高い評価を受けてはいない。例えば、Mario Praz は *The Hero in Eclipse in Victorian Fiction* の中で Trollope のことをやや蔑んだ口調で「ブルジョワ小説家」、あるいは「凡庸なビーダーマイヤー精神 (“the Biedermeier spirit”) ……の典型的な代表」(265) と評している。また *Criticism and Ideology* の Terry Eagleton に至っては、Trollope の作品は「平凡なブルジョワ経験論の反映に過ぎない気分に欠けた『リアリズム』に墮している」(181) とさらに手厳しい。しかし、Praz や Eagleton の言うようなブルジョワ階級の価値やモラルを写しだす姿勢は、果たしてこの作家の全貌を語るものなのであろうか。Trollope の小説世界を別の角度から評価することはできないのであろうか。

この意味で、Bill Overton が Trollope の小説の中に “division” (1) ——いわば分裂した2つの声を指摘したことは意義深い。一言で言えば、Overton は、語り手が作者の代理としてその考えやコメントを表明している声と、個々の小説のストラクチャーからより間接的に浮かび上がってくる声とを区別しているのである(2)。Overton は前者を “the official Trollope”、後者を “the unofficial Trollope” (2) と呼んでいる。そしてこのような彼の見方によれば、先に挙げたような Trollope の「批判者達」は、主として作品の表面に表れている “official” な Trollope のみを扱っているということになる(2)。

このような Overton の論を基盤として、本論では特に the “official” と the “unofficial” ——この2つの関係から Trollope という作家を捉えていきたい。まずは、the “official” の面であるが、これは簡単に言えば、

保守的、中産階級的な考えを読者に説く語り手に代表されるといってよいだろう。一般にこういった語り手の声は「バーセットシャー年代記」(*the Chronicles of Barssetshire*) など初期の作品により顕著に認められる。例えば、その第三作目の *Doctor Thorne* (1858) の冒頭で、語り手は緑の牧草地、波打つ小麦畑、しっかりした作りの黄褐色の教会、ブナ並木やチューダー朝の邸宅等が並ぶイギリスの農村を描写し、確信をもって「恵まれた実り豊かなゴセン(“Goshen”)の地」(1)と讃えている。Raymond Williams が *The Country and the City* の中で半ば皮肉をこめて示唆しているように、ここには貧しさに苦しむ農民たちの現実はない。そして、その「平穩で魅力ある社会の構造を乱すいかなる重要な道徳上の問題もない」(175)のである。

England is not yet a commercial country . . . and let us still hope that she will not soon become so. She might surely as well be called feudal England, or chivalrous England. If in western civilized Europe there does exist a nation among whom there are high signors, and with whom the owners of the land are the true aristocracy, the aristocracy that is trusted as being best and fittest to rule, that nation is the English. (12)

上の文章には明らかに、いわゆる「エスタブリッシュメント」側に立った語り手の視点が感じられる。そしてこのような価値観は疑問の余地のないものとして提示されているのである。

一方、1860年以降に書かれた Trollope の小説においては、作品世界がより複雑になり、語り手が“officially”に公言していることや作品全体の表面的な意味を危うくする^{アンダー・マイン}ような subversive な力がナラティブの中で次第に見られるようになってくる。これは小説の表面的な意味を完全に覆すには及ばないものの、それに対抗する勢力となって作品中に興味深いテンションを生み出していく。

こうした作品の表面的かつ中心的な意見に対する“official”で subversive なエネルギーは、実際には Trollope の後期の「暗い小説」(“dark novels”)に登場する“eccentric”⁽¹⁾なキャラクター、即ち社会やコミュニティと相容れずに「周縁」に追いやられてしまった者の動きによく表れていると思われる。それは例えば、変人であったり狂人、アウトローや犯罪者、外国人、反逆する女等に代表されよう。Trollope が一貫してプ

ロットよりキャラクターに重きを置く作家であったことは「自伝」(*An Autobiography*)その他によって知られるところであるが、私がここで特に強調したいのは、Trollopeの多くの小説で読者を最も引き付けるのはコミュニティの秩序を乱したり破ったりするような逸脱したキャラクターだという事実である。例えば、*The Last Chronicle of Barset* (1867)の偏屈な変り者 Josiah Crawley、*The Eustace Diamonds* (1873)で宝石欲しさに偽証の罪を重ねる Lizzie Eustace、そして *The Way We Live Now* (1875)のユダヤ人詐欺師 Augustus Melmotte などはある意味で、小説中「道徳的規範」として“officially”に称揚されている Septimus Harding や Lucy Morris、Roger Carbury よりも魅力的で印象深い人物になっているのではないか。ここに Robin Gilmour がいみじくも Trollope の小説における「セントラル・パラドックス」と呼んだもの—即ち「社会や道徳上の規範の尊重と、そうした規範から外れた逸脱者へのある種の傾倒 (“a fascination”)」(“A Lesser Thackeray? Trollope and the Victorian Novel”, 201)—が見られるのである。

Trollope の語り手は「親愛なる読者」(“my dear reader”)と手を結び、イングリッシュ・ミドルクラスの価値を以て上に述べたような異分子たちをその語りの中に封じ込めようとする⁽²⁾。しかし、こうした異分子たちの抗う力はしばしばそういった権威を弱め或いは凌駕して、作品の“official statement”との間にギャップを生み出すのである。

私の考えではこうした the “official” と the “unofficial” の関係が最も複雑に表れているのが、Trollope の晩年の代表作、*Mr. Scarborough's Family* (1883) である。以下、主人公のエキセントリックな老人、John Scarborough に注目しながら、この小説における the “official” と the “unofficial” の競合とその行方を見ていきたい。

II. *Mr. Scarborough's Family*—「法」(law) と「正義」(justice) の対立—

Trollope は *Mr. Scarborough's Family* において John Scarborough が放つ subversive なエネルギーを生き生きと描き出した。自らの意志を貫くため法の権威に立ち向かうこのキャラクターは、作品の大きな魅力といえよう。しかしさらにこの作品を興味深くしているのは、Scarborough によってナラティブの中に引き起こされる “unofficial” な力が、実

は小説中で“officially”に支持されている保守的な価値と微妙に繋がっていることである。これは特に小説の半ば以降で次第に露見していく。

まず、小説の前半で Trollope は、弁護士 John Grey と彼の依頼人である John Scarborough——この二人のキャラクターを併置させて「法」(law)と「正義」(justice)という基本的な対立を設定している。Coral Lansbury がその著書 *The Reasonable Man: Trollope's Legal Fiction* で検証しているように、Trollope は作家として終始、法や法が絡む問題に並々ならぬ関心を示してきた。事実、*Mr. Scarborough's Family* のストーリーにおいても法は重要な役割を果たしている。特徴的なのは、この小説では他の作品に見られるほど法がネガティブには描かれていないという点であろう。例えば、Trollope の多くの作品で弁護士は鋭い批判の対象になっている。しかしこれは *Mr. Scarborough's Family* の Grey には相当しない。彼は明らかに Dove (*The Eustace Diamonds*) のように無能でもなければ、誠実な証人を脅し付けて裁判を有利に運ぶ Chaffanbrass (*Orley Farm* [1862]) のように悪辣でもない⁽³⁾。全般的に Grey は、多少理想主義の傾向はあっても信頼のおける良心的な弁護士として小説中“officially”に称賛されている。“Mr. Grey had a well-earned reputation for professional acuteness and honesty”(172)。55章で読者は Grey 自身の口から、彼が法を“Holy Writ”(526)と見做し、法と正義の完全な一致を信じていると聞く。このような Grey は法の權威を悉く無視する Scarborough と際立った対照を成すのである。Scarborough は独立心が非常に強く、社会一般の規則や慣習に挑むことも憚らない。Grey と Scarborough の二人に関して、語り手は基本的にこの小説中の「世間」(“the world”)一般と意見を共にしているようである。“Mr. Grey was a thoroughly respectable man, and Mr. Scarborough, though upright and honourable in many dealings, had not been thoroughly respectable. He had lived with his wife, off and on as people say...”

(3). 語り手のこの言葉は、「(節操のある) Grey=規範」と「(自由放埒な) Scarborough=逸脱」という関係を“officially”に定めるものである。

しかし、ストーリーが進行するにつれ読者は、こうした見方に対抗するいわば“unofficial”な見解がナラティブの中で徐々に勢いを増していくことに気付く。そもそも Scarborough が法を毛嫌いするのは、それが様々な形で彼の行動を制限・束縛するからである。とりわけ、かれは長

子相続・限嗣相続の法を唾棄した。これらの法に従えば Scarborough は、土地管理者としての能力や資質の有無に拘らず、Tretton Park を長男に譲渡しなければならない。しかし、果たしてたまたま初めに生まれてきた者が、次に生まれてきた者を犠牲にして、無条件に全ての特権を手にしてよいものであろうか？ Scarborough はこのような疑念を抱き熟慮した末、Tretton Park の相続人は“natural justice” (Edwards, 203) に従って、二人の息子のうちから選ぼうと決意した。それは端的に言えば、それぞれの息子の人間性によって判断するということである。Scarborough の判断基準は、具体的には次の一文に要約されるであろう。“All virtue and all vice were comprised by him in the words ‘good-nature’ and ‘ill-nature’” (194).

こうして、Grey の信奉する「法」の権威と Scarborough の主張する「正義」、「natural justice」との対立が浮かび上がってくる。小説の前半におけるナラティブの動きを見る限りでは、後者が前者を漸次押し凌駕していくかに見える。実際ストーリーの中では様々なレベルで、法や規則などの抽象的な原則はモラリティーアブストラクト プリンシプルに関わる問題においては、絶対的権威を持ちえないことが示されるのである⁽⁴⁾ (Harvey, “A Parable of Justice”, 424)。

まず第一に、広い意味で社会の規則や慣習などは所詮「恣意的な」ものに過ぎないということが露呈される (Overton, 184)。例えばこの小説では「紳士たる者は嘘をついてはならない」という社会の暗黙のルールが、折りに触れて示唆される (Overton, 185)。自らの結婚に関して二度も周囲の者を騙した Scarborough は、決して誠実な Grey に許されることはない。けれどもその一方で Harry Annesley のようなケースがあることも忘れてはならないであろう。真夜中家路をたどる Harry は突如、恋敵の Mountjoy Scarborough に襲われる。怒りに駆られた Harry は衝動的に Mountjoy を殴り倒し、そのまま彼を路上に置き去りにする。そして後に狡猾な Augustus Scarborough に兄 Mountjoy の失踪について詰問されたとき、Harry は咄嗟に Mountjoy とは「凡そ三ヶ月も会っていない」(46)と偽ってしまうのである。この場合、多くの読者は状況を斟酌し、Harry を「無罪放免」と断ずる気持ちになるのではないか。第一に Harry が Augustus に嘘をついたのは、Mountjoy との争いの原因となった女性、Florence Mountjoy の名を出してはならないといういわば

騎士道的な(chivalrous)配慮が働いたためと考えられる。次に、読者はこの時点までに Augustus の悪意に満ちた性向に気付いており、彼が Harry に偽りの証言をするように仕向けるのにも何か卑劣な魂胆がある筈だと疑わずにはいられないのである。事実 Augustus は Harry を憎悪し、予てから彼を窮地に陥れるチャンスを窺っていたのであった。こういった角度から見ると、Harry は罪を犯したというよりもむしろ被害者であるといえよう。上の Harry のケースに示唆されるように、Trollope は「理論」と「シネリー実際」の間のギャップに興味を抱き、様々な作品の中でその問題を扱った。彼の小説世界では、例えば「紳士たる者は嘘をついてはならない」といった“official”なルールは完全に否定されはしない。にもかかわらず多くの場合、個々のケースに付随する事情や状況がそういった抽象的な規則・慣習よりも重みを持つように描かれている⁽⁶⁾。つまり、「シネリー実際」が孕む“unofficial”な「シネリーストーリー」が、「理論」に内在する“official”な権威をしばしば覆すのである。

このことはさらに「シネリー困習の卑屈な奴隷」(Edwards, 202)である Peter Prosper が、風刺的に描かれている点からも裏付けられる。物の見方が単純で柔軟性に欠ける Prosper は甥の Harry が Mountjoy のことで嘘をついたことが許せない。彼にとってそれは正に「シネリー弁明の余地のない、紳士にあるまじき偽り行為」(Wright, 149)なのである。立腹した Prosper は Harry を自分の相続人にはしまいと考えて、地元の醸造業者の娘、Matilda Thoroughbung に求婚する。しかし彼女が、実はその名(“Thoroughbung”)に暗示されるように (Wall, 325) ひどく騒々しい、下品な女であると知って失望する。50章、“The Last of Miss Thoroughbung”には「紳士」としての体面を汚さずに何とかこの婚約を解消しようとする Prosper の奮闘ぶりがコミカルに描写されている。*The Eustace Diamonds* の Lord Fawn と同様、Prosper は「紳士は約束を破ってはならない」という“official”な仕来りに涙ぐましい(?)までに固執するのである。

Geoffrey Harvey らの批評家が指摘するように、実際 Prosper は主人公の Scarborough と「シネリー喜劇的なコントラスト」をなす (“Introduction”, xv)。Prosper は、Scarborough のように結婚を限嗣相続という法の^{シネリー}抜け道として利用しようとした。しかしながら、Harry を出し抜こうという Prosper の決意にはそもそも些末な出来事—例えばこの甥が日

曜日に行なう長々しい聖書朗読を無視したことなどが少なからず関係しているのである。これを考えあわせると、Prosper の動機は甚だ偏狭で馬鹿馬鹿しいものだと云わざるをえない。一方、Scarborough は相続の件に関しては、少なくとも自分自身の信念に基づいて、巧妙に行動したと思われる (Edwards, 202)。要するに一言で言えば、Prosper は Scarborough の長所や魅力の「引き立て役」となっている。即ち、Prosper の小心、度量の狭さと対比される時、この“eccentric”な主人公 Scarborough の勇気や高潔が一際光彩を放つのである。

Scarborough は自らが信じる“natural justice”の追求にかけては、大胆不敵で断固たる姿勢を貫く。周りの者を利用し欺くことに関しても、彼は「世間」が何と言おうが一向意に介さない。しかしまた、Scarborough が一生を通じ、他人への愛や情けに動かされて行動してきたという点も重要であろう。例えば、父親として Mountjoy と Augustus の幸福を願ひ、Scarborough はできる限りのことをしてきた。また、彼は寛大な地主として地元の住民たちに慕われていたという。21章では、小作人の家を建て直したり(非国教徒も出席できるような)学校を創設したりといった Scarborough の善行が語られる。このように見ると、P. D. Edwards の示唆する通り、他人への思いやりという点では、Scarborough は Lizzie Eustace や Augustus Melmotte 等の、常に自己中心的で他人を愛せない“eccentrics”とはかなり異なっているといえよう(201)。確かに、Scarborough が並はずれた大嘘つきであるという事実は否定できない。しかし、ここで Scarborough の医師、「病室で道徳的判断を留保することに慣れている」(Harvey, “A Parable of Justice”, 427) Dr. Merton が、彼の患者について興味深いコメントをしていることに注意したい。

One cannot make an apology for him without being ready to throw all truth and all morality to the dogs. But if you can imagine for yourself a state of things in which neither truth nor morality shall be thought essential, then old Mr. Scarborough would be your hero (567-68).

これは、小説の初めに構築された Grey (規範) と Scarborough (逸脱) の“official”な関係に対抗し、その権威を弱める“unofficial”な見解である。実際、法を操作する Scarborough の悪知恵にも拘らず、読者は彼の豪放な生き方にある種の感銘を受けずにはいられない。それはおそら

く Merton の言う “romantic”⁽⁶⁾(514)なものを、このエキセントリックな老人の中に見出すからではなからうか。“... he has within him a capacity for love, and an unselfishness, which almost atones for his dishonesty. And there is about him a strange dislike to conventionality and to law which is so interesting as to make up the balance” (514). Merton のこのような見解は全体的に見て、それまでのナラティブの動きと一致していると思われる (Levine, 201). Scarborough の subversive なエネルギーが存分に発揮され、彼の魅力が小説の中心を支配するに従って、(法や規則といった)「^{コンヴェンションナリティーズ} 因 習」の “official” な領域が脅かされていく。そして皮肉なことに、こうしたプロセスは語り手自身によっても間接的に強化されているのである。

The Unofficial Trollope の中で Overton は、この小説の語り手が53章、“The Beginning of the Last Plot” に至るまで、Scarborough の二通の結婚証明書のことを読者に伏せている点に注目する。Overton が示唆するように、この事実は小説家 Trollope が多くの作品の中で誇らしげに主唱してきた方針——「読者との完全なる信頼関係」——に反していると考えられる (191)。“Our doctrine is, that the author and the reader should move along together in full confidence with each other” (*Barchester Towers*, I: 144). 語り手のこの言葉は実際、人じらしの秘密や謎を中心に展開するタイプの小説に対する Trollope の批判を伝えるものである⁽⁷⁾。事実、*The Eustace Diamonds* や *Orley Farm* 等の作品では、消えた宝石や Sir Mason の遺言補足書に関する読者の疑問は、ストーリーの比較的初めの方で解消される。ところがこの *Mr. Scarborough's Family* について言えば、例えば38章で語り手は、Scarborough が Mountjoy を再び相続人にすることは「有り得ない」 (“impossible”, 364) と後に明らかに虚偽と判明することまで平然と言っているのである (Overton, 191)。このような箇所において語り手は、抜け目のない主人公の詐術に加担している一つまり、後者と共謀して読者を欺いている一ようにさえ見える⁸。この時おのずと、自らが提示した方針（「読者との完全なる信頼関係」）に背いた語り手の信憑性そのものが問われることになる。従って、語り手が当初設定した Grey と Scarborough の “official” な対立、或いは前者の後者に対する優位性もまた危ういものになるのである。

このように Scarborough の良さが際立ち、また語り手の“official”な権威の疑わしさが顕れることによって、「規範」と「逸脱」のコンヴェンショナルな関係はほぼ「反転」(“reversal”)の方向に向かう(Garrett, 220)。実際この「反転」に、Trollope の後期の小説の一つの特徴があるといえるであろう。前期の小説、例えば1850年代に書かれた *Barchester Towers* (1857) においては、Archdeacon Grantly ら「高教会派」^{ハイチャーチ}が支配する Barchester の平穏な世界に参入する「低教会派」^{ロウチャーチ}の Obadiah Slope や Proudie 夫人は常に「規範」に対する「逸脱」⁽⁹⁾、或いは「中心」に対する「周縁」であり、前述したような力関係の subversive な変動はみられない。けれども、私がここで特に目を向けたいのは、*Mr. Scarborough's Family* が持つもう一つの subversiveness である。この小説の真の興味はある意味で、そうした subversiveness にあると思われるからである。

冒頭で示唆したように、小説の後半では Scarborough の導くナラティブの中の“unofficial”な力が、皮肉にも Grey の体現する“official”な価値と全くの無関係でないことが明白になっていく。Harvey も論じているように、Scarborough の法に対する subversive な態度は本質的に、彼の根底にある「強い保守性」に根ざしたものである。「……彼(Scarborough)にとって地所^{プロパティ}の基本的価値は秩序と継続のシンボルとしてであり、彼はその譲渡において、一家が分裂し一つのコミュニティ全体が崩壊してしまう可能性を認めていたのである」(“A Parable of Justice”, 420)。一般に Trollope の小説に登場する地主の多くは皆、祖先に敬意を払い、一家に代々受け継がれてきた土地を維持することに大きな責任を感じているようである。例えば、*The Way We Live Now* の最終章で Roger Carbury は従妹の Henrietta に次のように語っている。“... he [a man] owes a duty to those who have been before him, and who have manifestly wished that the property should be continued in the hands of their descendants. These things are to me very holy” (II: 473)。一見したところでは、このような古風な考えの Carbury と社会の因習に立ち向かう Scarborough は、全く異なったタイプの間人である。しかし私には、Scarborough も心の奥底では Carbury Hall の主が抱いていたような信念、Gilmour が一種の「宗教」(“religion”)と呼ぶような土地信仰⁽¹⁰⁾ (*The Idea of the Gentleman in the Victorian Novel*, 157) を持っていた

ように感じられる。実のところ、Scarboroughが当初Mountjoyを「非嫡出子」と宣言したのは、後者に借金の返済を迫る債権者の群れを追い払うためであった。Scarboroughは、Tretton Parkを維持するためには嘘の証言をも辞さないのである。

また、Scarboroughの主張する“natural justice”が結果的に、彼が忌み嫌っていた長子相続・限嗣相続の法規と一致する点も看過できない(Harvey, “Introduction”, xix)。Scarboroughの“natural justice”による判断基準については既に触れたが、実際“ill nature”のAugustus(次男)ではなく、“good nature”のMountjoy(長男)がTretton Parkの正当な相続人と最終的に認められる。Mountjoyに関して言えば、彼はいわゆる道楽者ではあるが、確かにAugustusよりも温かみのある好人物である。それはMountjoyが時折示す父親への労わりや亡き母親に対する誇りから判断できよう。こうしてR. D. McMasterが言うように、畢竟相続をめぐる争いは一いかに放蕩息子であれ長男が相続し、社会の秩序が保たれる—というTrollopeのクラス・イデオロギーに沿った形で一応決着を見せている(141)。換言すれば、長子相続・限嗣相続に象徴されるようなイングリッシュ・ミドルクラスの伝統尊重が、この小説の“official”な狙いということになるのであろう。Scarboroughのキャラクターが全般的にかなり好意的に描かれているのは⁽¹¹⁾、結局、先に言及した彼の深層に潜む「強い保守性」が作品全体の“official”な狙いに通じているからなのかもしれない(R. D. McMaster, 141)。

しかし興味深いことに、この小説の根本に内在するsubversivenessは究極的には、主人公Scarboroughと“the official Trollope”が共有する「秩序と継続」への志向をも傷つけ、崩してしまうのである。第一に、読者は「紳士の地所」を守るためにユダヤ人の高利貸しを出し抜いたScarboroughの—そして“the official Trollope”の—策略に不正を見出ださずにはいられない(Overton, 193)。例えばOvertonも強調しているが、Mountjoyがロンドンのクラブから追放されたのは、彼が債権者たち(=ユダヤ人の高利貸し)をはめたインベブと疑われたからではなく、知人のCaptain Vignollesに賭博の借金を即座に返済できなかったからである(184)。つまり、皮肉な見方をするならば「紳士が高利貸しをだますのは許される。が、賭博仲間は(だましては)いけない」(Overton, 184)ということになるだろう。そしてここに浮かび上がってくるのは、「立派なイギリス紳士」

と「卑しむべき金貸しユダヤ人」という関係であり、またそれを生み出すイデオロギーに他ならない¹²。小説の結末近くには、Scarborough の大それた「詐欺行為」に心乱された高利貸しについて以下のような一節がある。“But it was pleasant to see how these commercial gentlemen... expressed their violent indignation, not so much as to their personal losses, but at the commercial dishonesty generally of which the Scarboroughs, father and son, had been and were about to be guilty” (584-85)。語り手の“gentlemen”、“commercial dishonesty”という言葉には鋭い皮肉が感じられる。語り手は明らかに高利貸しを「紳士」とは見做しておらず、また彼らの「誠実さ」など根本的に信じていないからである (Harvey, “Introduction”, xix)。さらに、語り手は Mountjoy を追い回す「脂ぎった」(99) Samuel Hart らを描き、その貪欲なイメージを強調することによって、「卑しむべきユダヤ人達」を「立派なイギリス紳士」の属する上品な社会から隔絶しようとする。けれども、父親の策略に巻き込まれた Mountjoy が良心の呵責を感じつつ認めているように、債権者側から見れば Scarborough 父子のしたことは正に「詐欺行為」そのものなのである。このように語り手の意向に反して、一見マイナーなキャラクターのユダヤ人高利貸しは、支配階級の論理に潜む利己主義や偏見を暴き、その権威を砕く役割を果たすのである。

さらに、Scarborough の策略が及ぼした結果という点から考えても、小説の“official”な狙いの正当性は一層疑わしいものになる。James Kincaid の指摘を待つまでもなく、Scarborough は実際には殆ど何も達成しなかった (254)。例えば、長男／相続人の Mountjoy が持つ善への可能性が度々暗示される一方で、彼に自己を律する強い意志が欠けていることもまた事実なのである。これは、Tretton Park の将来にとって無論致命的である。42章に描かれた Vignolles との一件から判断するかぎり、Mountjoy は今後も賭博癖を克服できないように思われる。また、次の“The Beginning of the Last Plot” (53章) におけるエピソードは、Tretton の屋敷には、実質上 Mountjoy の居場所がないということを鮮明に物語っている。数か月ぶりに我が家に戻った Mountjoy は、書齋をぶらつきながら手当たり次第に本を取って読もうとする。ところが、詩にせよ散文にせよ、その内容が皆目理解できない。諦めた Mountjoy は辺りを見回し、“three or four days at the club might see an end of it all”

(511)と哀しく思うのである。ここで読者は疑問を禁じえない。先祖から代々読まれてきた書物を解せない Mountjoy は結局のところ、何世代にも互って受け継がれてきたこの家の精神や価値を認識し継承していくことができないのではないか？ Mountjoy がやがて屋敷や土地全てをばくちで失うのは想像に難くない。つまり、Scarborough が抱いている Tretton Park の「秩序と継続」への強い願いは成就しそうにないのである。これは Scarborough にとって事実上、「敗北」ということになるのではあるまいか (Lansbury, 178)。

加えて、Scarborough の行動が周囲の人々に軋轢や不幸をもたらしたことも重要であろう。Scarborough の息子、Mountjoy と Augustus が父親の策略によってそれまで以上に疎遠になったことは言うまでもない。そして忘れてはならないのが、Scarborough の弁護士 Grey の隠退である。Grey は、自分の依頼人に欺かれ利用されたという事実にかく傷つき、またこのような「不正」が罷り通る社会に失望して、仕事を辞める決意をする。62章で彼が自分の娘 Dolly に胸中を吐露する場面は、悲哀に満ちている。“‘As things go now a man has to be accounted a fool if he attempts to run straight...’”(599). 恐らく Scarborough が犯した最大の罪は Grey の誠実な心を踏み躪り、後者の、他人及び自分自身に対する信頼を粉砕してしまったことではないか。こういった観点から見ると、P. D. Edwards が Scarborough を Trollope が創造した「最もまともで最も魅力的な」アウトロー(207)とし、このキャラクターの良さを手放して称賛・強調するのは、いささか公正を欠いているようにも思われる。これまで示唆してきたように、小説の半ば以降、subversive な Scarborough の行為に潜む不正やその結果の虚しさが徐々に顕在化されてくる。そして、それは Scarborough、そしてこの小説が根源的に志向する、イングリッシュ・ミドルクラスの「秩序と継続」の“official”な意義に大きく揺さぶりをかけるのである。

III. 結び

以上見てきたように *Mr. Scarborough's Family* において、保守的で“official”な価値は二つのレヴェルで脅かされる。第一にそれは、Grey の信奉する法の権威と Scarborough の求める“natural justice”の闘ぎ合いに認められる。そして次に、この subversive な主人公と因習との隠れ

た結びつきが露見すると、ナラティブは Scarborough の「秩序と継続」への志向が内包する問題を暴いて、その権威を砕く。こうして Scarborough、そして小説が“officially”に支持するミドルクラスのイデオロギーの基盤は危ういものになるのである。社会学者の J. A. Banks は “The Way They Lived Then: Anthony Trollope and the 1870’s” というエッセイの中で、次のように述べている。「Trollope は時折、読者を作品世界から一歩下がらせ、そこに掲げられている規範を自分と一緒に眺めさせて、そうした規範の存在自体に正当性があるかどうか考えさせる」(188)。このコメントはまさに、上述した *Mr. Scarborough’s Family* の世界に妥当するといえよう。

また、上の Banks の言葉が、Trollope のモラル・ヴィジョンにおける（「規範の提示」と「その規範に対する疑念」といった）パラドキシカルな “duality” を示唆している点も意義深い。Trollope は、多くの作品の中で社会と個人との関わりを追求してきた。主に前期の小説では、コミュニティの支配的な考えに一時期反発し苦しみながらそれを克服していく ^{ヒーロー・ヒロイン} 主人公の姿がしばしば描かれている。例えば50年代に書かれた *Barchester Towers* や *Doctor Thorne* では、こうした者たちの葛藤が、コミュニティとの「幸せな和解」、さらには「自己確立」に到達するまでの過程として捉えられている⁽¹³⁾。これに対し1860年以降の ^{ダークノヴェルズ} 「暗い小説」では、彼らの抵抗や戦いそのものに焦点が当てられるようになる。こうした後期の作品において、Trollope は特に規範との衝突が激しく、コミュニティ内で孤立する “eccentrics” のケースを取り上げ、彼らの反逆の意味を探ったのである。Alice Vavasor や Glencora Palliser (*Can You Forgive Her?* [1864])、Crawley, Louis Trevelyan (*He Knew He Was Right* [1869])、Lady Eustace、Melmotte—Trollope が強烈なエキセントリック・キャラクターを次々と創造していった根底には、一人一人の複雑な個性や、Garrett の言う ^{サブジェクティヴィティ} 「主観性」(190)に対するこの小説家の強い関心が見出させるのではないか。“Every man to himself is the centre of the whole world; —the axle on which it all turns. All knowledge is but his own perception of the things around him. All love, and care for others, and solicitude for the world’s welfare, are but his own feelings as to the world’s wants and the world’s merits” (*Can You Forgive Her?* I: 305-6)。こうして Trollope は一方ではコミュニ

ティの規範を保持しつつ、他方では規範に反旗を翻しその「恣意性」を頭にする (Levine, 202) “eccentrics” の躍動を鮮やかに描いたのである。

本稿で論じた *Mr. Scarborough's Family* の John Scarborough は、こうした反逆的な “eccentricity” を「最大限に」発揮した (Garrett, 219) キャラクターだといえよう。実際 Scarborough は、社会の規範から完全に解放されているようにさえ見える。彼は、Crawley のように最終的にコミュニティに同化／吸収されもしなければ、Melmotte のように規範に背いた報いとして作品世界から掃討される訳でもない。このような Scarborough の “unofficial” なエネルギーがナラティブの中に引き起こす震動、そしてその “unofficial” なエネルギーと小説全体の “official” な狙いとの微妙な関係は、(Mountjoy の相続や Harry と Florence の結婚など) 一見ハッピーエンドに見えるストーリーの結末を揺るがし、解消されることのないテンションを作中に生み出す。序では、Trollope を平凡なブルジョワ作家と片付ける批評家たちの見解に触れたが、この晩年の大作に繰り広げられる二つの力——the “official” と the “unofficial”——の競合は、そういった従来のイメージとは異なるこの小説家の一面を照らしたすものではないか。

注

- (1) Peter Garrett は *The Victorian Multiplot Novels: Studies in Dialogical Form* の中で Trollope の小説における “eccentricities” に注目している。180-220。
- (2) そこには自然「私達」(“genteel” なコードを共有する語り手と読者) と変り者である「他者」(コードに従わない “eccentrics”) といった関係が構築される。
- (3) 例えば、R. D. McMaster は Grey を「Trollope の最も魅力的な弁護士の一人」と評している。 *Trollope and the Law*, 145。
- (4) さらに Jane Nardin は、Trollope の小説において法とモラルティーが衝突する場合、一般に後者がより優先されると指摘している。 *Trollope and Victorian Moral Philosophy*, 13。
- (5) この点を Stephen Wall は、 *The Eustace Diamonds* の Lizzie Eustace が優柔不断な Frank Greystock を誘惑する場面を取り上げて明晰に論証している。 *Trollope and Character*, 270-72。
- (6) Donald D. Stone は *The Romantic Impulse in Victorian Fiction* の第二章で、Scarborough のキャラクターを「パイロニック・ロマンス」との関係から論じている。72-73。
- (7) Trollope は小説中にミステリアスな「サスペンス」を盛り込むことを一般

に好まなかった。この点を David Skilton は当時流行していた「センセーション・ノヴェルズ」との関連から考察している。“Introduction”, *Orley Farm*, viii-x.

- (8) *Anthony Trollope: His Art and Scope* の中で、P. D. Edwards は「Trollope はぬけぬけと（読者を）だましている」(200)とコメントしている。
- (9) 例えば口喧しい「かかあ天下」の Proudie 夫人は、理想的な妻 Susan Grantly とは対照的な、「ズボンをはいた女」(Juliet McMaster, 166) として終始滑稽に描かれている。
- (10) Gilmour は土地信仰という「宗教」が（小作人や国家に対する責任等も含んだ）地主のモラルティーに及ぼす影響に特に焦点を当てている。
- (11) Garrett は、Scarborough のキャラクターには（例えば Crawley のような “eccentric” に顕著な）「つむじ曲がり」の性質が付与されていないことを示唆している。219-220。
- (12) Overton は、この小説における高利貸しがユダヤ人の「ステレオタイプ」として描かれている点に着目し、Trollope は当時のミドルクラス一般が抱いていた偏見に与してしまっていると鋭く批判している。181。
- (13) この点については、J. Hillis Miller の *The Form of Victorian Fiction* の第三章、“Self and Community” に詳しい。特に137-38参照。

引証文献

- Banks, J. A. “The Way They Lived Then: Anthony Trollope and the 1870’s.” *Victorian Studies* 12 (1968): 177-200.
- Eagleton, Terry. *Criticism and Ideology: A Study in Marxist Literary Theory*. London: Verso, 1984.
- Edwards, P. D. *Anthony Trollope: His Art and Scope*. Sussex: Harvester, 1978.
- Garrett, Peter K. *The Victorian Multiplot Novel: Studies in Dialogical Form*. New Haven: Yale UP, 1980.
- Gilmour, Robin. *The Idea of the Gentleman in the Victorian Novel*. London: Allen, 1981.
- . “A Lesser Thackeray? Trollope and the Victorian Novel.” *Anthony Trollope*. Ed. Tony Bareham. New York: Barnes, 1980. 182-203.
- Harvey, Geoffrey. Introduction. *Mr. Scarborough’s Family*. By Anthony Trollope. Oxford: Oxford UP, 1992. vii-xxi.
- . “A Parable of Justice: Drama and Rhetoric in *Mr. Scarborough’s Family*.” *Nineteenth-Century Fiction* 37 (1982): 419-429.
- Kincaid, James. *The Novels of Anthony Trollope*. Oxford: Clarendon, 1977.
- Lansbury, Coral. *The Reasonable Man: Trollope’s Legal Fiction*. Princeton: Princeton UP, 1981.
- Levine, George. *The Realistic Imagination: English Fiction from Frankenstein to Lady Chatterley*. Chicago: U of Chicago P, 1981.

- McMaster, Juliet. *Trollope's Palliser Novels: Theme and Pattern*. London: Macmillan, 1978.
- McMaster, R. D. *Trollope and the Law*. New York: St. Martin's, 1986.
- Miller, J. Hillis. *The Form of Victorian Fiction: Thackeray, Dickens, Trollope, George Eliot, Meredith, and Hardy*. Notre Dame: U of Notre Dame P, 1968.
- Nardin, Jane. *Trollope and Victorian Moral Philosophy*. Athens, Ohio: Ohio UP, 1996.
- Overton, Bill. *The Unofficial Trollope*. Sussex: Harvester, 1982.
- Praz, Mario. *The Hero in Eclipse in Victorian Fiction*. Trans. Angus Davidson. London: Oxford UP, 1956.
- Skilton, David. Introduction. *Orley Farm*. By Anthony Trollope. Oxford: Oxford UP, 1985. vii-xvi.
- Stone, Donald David. *The Romantic Impulse in Victorian Fiction*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1980.
- Trollope, Anthony. *Barchester Towers*. Oxford: Oxford UP, 1991.
- . *Can You Forgive Her?* Oxford: Oxford UP, 1990.
- . *Doctor Thorne*. Oxford: Oxford UP, 1991.
- . *Mr. Scarborough's Family*. Oxford: Oxford UP, 1992.
- . *The Way We Live Now*. Oxford: Oxford UP, 1991.
- Wall, Stephen. *Trollope and Character*. London: Faber, 1988.
- Williams, Raymond. *The Country and the City*. London: Chatto & Windus, 1973.
- Wright, Andrew. *Anthony Trollope: Dream and Art*. London: Macmillan, 1983.